

## 「ウィルダネス環境下での組織論」

チーム・イーストウインド 田中正人

ウィルダネス環境下での組織論としては、安全性に大きく関わる問題に発展する懸念があることをまず重視したい。

自然環境下では少しでも条件が悪くなると冷静さを欠くシチュエーションが多くなる。疲労や緊張感、不安や恐れなど余裕がない場合、人はどうなるか？

各々の人間性(本性とも言えるが、ここが本当に課題。各自の深層的なコンプレックスも影響する)が現れ、エゴがぶつかり合う。自分と違うものを受け入れるのは中々難しく、どうしても自己中心的な感情が勝ってしまい、他人を受容する心のゆとりは無くなる。チームワークは放っておいて良くなることはあり得ない。各人が意識して努力し続ける必要がある。

ましてや厳しい自然環境の中で自己中心的な思考に支配されると責任感が無くなり、足の引っ張り合いにさえなることも珍しくない。そうなれば安全性は脅かされ、トラブルや事故に繋がる可能性が大きくなる。

こうした事態を避けるためにもチーム作りやその意識を高める必要性が出てくる。

チーム作りとしては、個々人が意識したり努力することと、組織としての課題がある。

個人の取り組みとしては、まずメンバー間の信頼関係を築く努力をすることが最重要である。

相手に興味を持ち、積極的にコミュニケーションを取る。相手の価値観や考え方の違いを知り、理解する。同時に自分のことも相手に伝え、そのすり合わせのなかで自分の課題も認識できることが望ましい。

こうしたコミュニケーションを円滑に進めるには、精神的に安心安全な環境が必須となる。上下関係を作らず、遠慮なく意見を言い合える関係作りが必要。特に立場が上になる人の言動が重要となる。上から目線の言動をしない。見下さない。どんな相手(子ども)にでも敬意を払う。自分の失敗を素直に認め、他人の失敗には寛容になる。責めたり批判をせずにフォローする行動を取る。要は、相手に「自分は認めてもらえている」「自分は受け入れられている」と感じてもらえることが大事である。人の尊厳を守るという極めて基本的なことが日常ではできていないことが多い。

組織としての課題としては、目的や目標の設定をして、その方法論やレベル設定(基準作り)を意見交換しながら共通認識としていくことが重要となる。

その中で、リーダーが率先垂範して熱意や高い基準を示すことはチームのレベル向上に大きく貢献する。

また、情報を共有し全体像の把握ができるようにすれば、メンバーが能動的に動くことができるようになる。

お互いの強みの把握ができ、各々の役割の認識ができれば強固なチームとなる。さらに知識や技量の差を埋めるように互助できればチーム内の信頼感が高まり、最高のパフォーマンスが発揮できるようになる。

こうした内容を実際のアドベンチャーレース活動での実例をもとに紹介していく。